

## 書 評

坂井妙子著『メイド服とレインコート  
——ブリティッシュ・ファッションの誕生』  
(勁草書房、2019)

高橋 美帆



EU 離脱騒動中、夏のロンドンではニュースで報じられるほどの緊張感はなく、いつものように多様な人々で溢れていた。だが、同じく多様なはずの服装に注目すると、そのスタイルはどこか一様である。肌の露出度の差はあれ、基本はTシャツにジーンズ、ファスト・ファッションの夏服、そのあいだをモノクロームのブルカが埋めていく。かつてロンドンの夏を彩っていた、あの(いささか野暮ったい)イギリスらしい花柄のワンピースはどこへいったのか。

本書『メイド服とレインコート』の舞台である19世紀のロンドンは、「多様な人種を引きつけ、魅了するコスモポリタン都市」であり「消費文化の中心」で、普仏戦争後のパリに代わって「ファッションを発信する都市」となった(pp. 4-7)。そのロンドンで生み出されたモダンな「ブリティッシュ・ファッション」の成立と発展を、本書は全7章、5種類の衣服を挙げて考察している。19世紀のロンドン固有のファッションの中心はミドルクラスであるという立場で、ヴィクトリア女王につながるような上流階級は対象にしていない。また、イギリス人のフランス・モードに対するコンプレックスが大きな前提となっており、それは本書全体の通奏低音となっている。以下、各章ごとにトピックを取り上げて、瞥見していこう。

第一章「ミドルクラスのファッション・センス」では、ブリティッシュ・ファッションを生み出したのはミドルクラスの女性たちである、という。彼女たちは「道徳」と「家庭」という価値観に基づいて、上流階級のスタイルを実用的に工夫して取り入れつつも、そこに階級にふさわしい「質素の美德と実用性」という独自性を付加した。彼女たちの価値観は「コルセツ

ト論争」と「色彩コンプレックス」という問題からさらに掘り下げられ、女性たちがしかるべきファッション・センスを身に付けるために、「自己抑制」を是として日々努力する姿が描き出される（その努力はもちろん隠されなくてはならない）。

第二章「ホームズはレインコートで沼地を這い回る」では、女性服の対照項としてではなく「イギリス人の国民性を凝縮したファッション・アイテム」として、男性用防水コートに目が向けられる。紳士服および旅行着としての防水コートの発達史に始まり、コナン・ドイルの作品に見られるファッションを通じた当時の「英国紳士」像が探究される。服装によって登場人物の階級、職業、経済状態を書き分けるドイルの描写力の考察も興味深い。つねに「几帳面で端然としている」ホームズ像を通して垣間見られるのは、「慎み深さ」という美德、「抑圧された美しさと秩序」、秘すべき「ダンディズム」である。この章に限らないが、挿絵と注釈にも説得力があり、ファッションの描写に注目してドイルを読み直してみようという気にさせられる。

第三章「乗馬服でキリッと美しく」では、女性用乗馬服の発展、女性美の受容の変化、イギリスの女性像の近代化について述べられる。19世紀半ばの鞍の改良によって、乗馬は上流階級からミドルクラスへと一気に広まった。乗馬の大衆化に伴い、男性スーツを応用したジャケットと乗馬用スカートの組合せである女性用乗馬服は、ミドルクラスの信条である「節約」と「工夫」を経て、より実用的で美しいものに改良された。そして、植民地への渡航や滞在のための旅行服となった。

著者によれば、乗馬服は「イギリス女性の心身を男性と同等に強く、健全」にして、「男性の真の友」とするための装備であり、「イギリス独自の新しい女性像を具現した」(p. 87)。一連のイラストでは、夫の赴任先インドに同行する女性が描かれている。乗馬服に身をつつんで慣れない馬を御しながら、本国と同様に「(馬術の)技を隠す優美さ」、「自制」、「洗練」を保とうと努める姿が印象的である。

第四章「メイドのハンナはファッション嫌い？」では、本書のタイトルであるメイド服がいよいよテーマとなる。イギリス社会における階級と服装の関係について、ミクロな視点から実在のメイド、ハンナ・カルウィック

(1834-1909)の日記が読み解かれていく。ハンナは雑役婦(最下層の家事使用人)であるけれども、実用的で動きやすい質素なドレスを着て、仕事に誇りと喜びを感じている。彼女はその後、自分の働く姿を偏愛する上流階級の恋人と秘密裏に結婚するが、結婚後も表向きには主人に仕える使用人として振る舞い続けた。彼女は、妻らしく「レディー」の服装を身に着ける時、「息苦しい」「辛い」と感じる。ハンナは、男性の庇護の下で精神的・経済的束縛を受けるレディーのファッショナブルなドレスよりも、働いて自活するメイドの衣服とアイデンティティを選択するのである。

これは、自立した労働者としての待遇を求める使用人と旧態依然たる雇用主との間で多くの争議が勃発した時代のことである。雇用主は「不適切な使用人」(pp. 102-3 に面白いイラストあり)を抑え込むために「階級指標」として服装を利用し、使用人にその身分に応じた様々な「制服」を強要した。とくにメイドには勤務中の制服だけでなく、プライベート時にも質素な服装を強要した。しかし自活する労働者階級の女性たちは、雇用主からの介入を嫌い、流行のファッションを身の丈に応じて楽しむようになる。

第五章「夏の海辺で、花柄のコットン・ドレス」では、「プリント・ドレス」と呼ばれるコットン製の柄ものドレス、とくに流行・衰退・リバイバルを繰り返す花柄ドレスの歴史が語られる。筆者などは、いささか懐かしさを禁じえないイギリス女性の定番ファッションである(であった)。

このファッションは、1950年のホロックス・ファッションズ(満開の花柄コットンのワンピース)で頂点を極めた。その系譜を遡って行き着くのが「ドリー・ヴァーデン・コスチューム」である。1870年ディケンズの死後、『バーナビー・ラッジ』(1841)に登場する娘ドリー・ヴァーデンを描いたフリス(1819-1909)の絵画が競売にかかって高額で落札された。そのニュースの中で、絵姿のドリーが「イギリスの乙女の典型」と評され、「一大ドリー・ブーム」が起きるのである。そのひとつとして、小説の時代設定(1780年)に合わせてフリスがドリーに着せたドレスを真似た、古風な花柄チンツのプリント・ドレスが大流行した。このドレスは、下層ミドルクラスの若い女性のために安価に商品化され、鉄道により急速に大衆化がすすんだ海浜のリゾートに、当時の「ファスト・ファッション」として君臨する。

第六章「イギリス人のアート感覚がファッションになる！」では、「エステティック・ドレス」の成立と商業的發展、そして「イギリスらしさ」の新たな展開について述べられる。ラファエル前派と関連のあるこのドレスは、コルセット不要、自然染料の柔らかな色合い、装飾のない素朴なスタイル、豊かなドレープを特徴とする。それは「最新の技術を拒絶し、階級指標であることを拒否したが故に、反社会的な衣服」(p. 148)であった。このドレスを商業ベースに乗せて、ミドルクラスのモダンなファッションにしたのがリバティ商会であった。同商会は、批判に対しては話題性を利用して認知度向上に役立て、ワイルドも加わっていた衣服の改良運動に賛同するなどして、リバティ製エステティック・ドレスを戦略的に広めていった。「健康的で、快適、美しく装う」ためのこのドレスは、まずはロンドンのファッション界を席卷し、やがて20世紀初頭までには国内外のファッションの基準になった。新しい意識を持つ女性たちはこのドレスを身に付け、「階級指標」から外れて、自己を表現して個性を確立しようとした。そして、このドレスのもつ「芸術的な卓越」という特質によって、ミドルクラスのファッション・コンプレックスは克服される。ひいては「イギリスらしさ」に裏打ちされた、美しく改善された自己イメージの獲得に至るのである。

著者は「イギリスらしさ」を「実用性の重視、発明の才と工夫」(p. 63)と捉えている。フランス・モードに対するコンプレックスを、ミドルクラスの女性たちは「イギリスらしさ」と「自己抑制」で克服しようとした。その努力がエステティック・ドレスでひとつの結実を得る流れは、説得力があった。また、5種類の衣服の歴史を一つの大きな物語として読んでみると、「イギリスらしい」ブリティッシュ・ファッションを育んだのは、ミドルクラスの実践力であると、改めて納得させられる。

さらに著者は、心身が、「健康・強靱であること、それを目指すことが美しさ、規律や洗練と解されるようになった」(p. 177)と強調している。なるほど旅行着ともなるレインコートや乗馬服はもちろん健康美を目指しているだろう。しかし、同時にそれは、植民地へ出かける者たちにとっての別の意味での「階級指標」となり、異郷でそれを着用する者の愛国心と結びついた面も否めないだろう。反社会的なエステティック・ドレスでさ

え「ファッションの基準」に変わると、イギリス(大英帝国)への帰属のしるしとなる。「健康的なファッション」は、国家に捧げるべき心身を鍛えるという不快な思想と表裏を成していたのではないか。衣服と「階級指標」との関係にはさらに複雑な分析が求められているように思われる。

冒頭で触れたように、グローバリゼーションの縮図ともいえる21世紀のロンドンで見られるファッションは、19世紀のミドルクラスが育んだブリティッシュ・ファッションとはかけ離れて見える。多文化の共生・共存といったきれいごととは裏腹に、グローバリゼーションはすべてを一様化してしまうのか。「イギリスらしさ」はどこへいったのか。本書を読んで一抹のノスタルジーを感じるのは、筆者だけではあるまい。

— 関西大学教授